



「歎異抄」(第二十四回) 樫 暁 講述

「歎異抄」 第十二章 続き
学問をむねとするは、聖道門なり、難行となづく。あやまつて、学問して、名聞利養のおもいに住するひと、順次の往生、いかがあるんずらんという証文もさうろぞかし。当時、専修念仏のひとと、聖道門のひと、諍論をくわだてて、わが宗こそすぐれたれ、ひとの宗はおとりなりというほどに、法敵もいできたり、謗法もおこる。これしかしながら、みずから、わが法を破謗するにあらずや。

(真宗聖典六三二頁)

学問中心の仏教は聖道門で難行道。つまり聖者の道ということ。凡夫が凡夫のままですか

る道ではない。曾我先生は若い時、唯識の学問をされたのですが、晩年の先生に会われた方が先生に「唯識の講義をしていただけませんか」と云われたら、先生は「今は本願を信じ念仏申すということがおたすけ、という世界に安住させていただいてるので今さら唯識の学問を人に教えようとは思っていません」と云われたそうです。

名聞利養というのは、名をあげ、金儲けすること。名をあげ、収入を得るということを目的にし、さとりを目指さず、或いは、さとりを得るといふことを建前にしているのは迷いの世界に転落してしまっている。

論争をくわだてるといふことは、皆、自分の方が正しいと云いたいわけですね。川柳で「法

光照寺寺報
発行所 宗教法人光照寺
〒331-0821
さいたま市北区別所町102-2
電話：048-651-2781(代)
FAX：048-651-2753
E-mail yasuragi@beige.ocn.ne.jp
ホームページ http://www8.ocn.ne.jp/~koshoji
発行人 池田孝郎

論はいづれ勝つても釈迦の恥」といふのがあります。さとりを得ることを願う仏弟子が議論をして勝つことを願っている。勝ちたいというところがあるのですね。名聞利養の他に勝他というのがある。

お釈迦様のさとりの世界は対立的なものではないけれども、仏法聴聞して敵を作ってしまう。法敵というより、法に関する議論によつて生じた敵と解釈しますが、我々も敵を作らないつもりでも作り、悪口を云わないつもりでも云っている。優しいことを云っているようで人にきついことを云っている。

謗法というのは謗つてはならない法を謗る。一番重い罪です。人の法を謗っているようだけれども、結局、自分で法を謗っている。本願を信ずることです

報恩講
十月二十六日(日)十時 厳修
詳細は三頁



盂蘭盆会法要住職法話



盂蘭盆会法要勤行

かるのである。
(当寺)「法話抜粋要約、文責副住職 釈徹照」次回へ続く



このところの世情は誠に心安らかに暮らすことが出来ない時代社会に突入しています。

団塊の世代の人々、それ以前の周辺の人々は、今日の日本の経済を築いてきた世代の人々です。戦後の貧しい物資のない時代から、アメリカに追いつき、追いこせのもと、経済戦争の渦中の企業戦士たちでありました。

そして、バブルの頂点の時は、アメリカを抜いてGNP世界一になったこともありました。

この世代の人々は豊かな日本、豊かな家庭を夢みて、一生懸命働

いて、子供達には衣食住を満たし、高い教育に心掛けて養育してきた。しかし、その子供達が成長して豊かさがあたりまえであり、戦後の民主主義教育が自由と平等の名のもとに個人主義の自分勝手な思考を深め、汗水流して働くよりも、自分の才能、能力を發揮して自己実現をはかりたいとして、「ホリエモン」を理想とする仮想空間のバーチャルを求めて、彷徨うている様にも見える。その現われがフリーターの層を作り、「天職」と教えられて、与えられた仕事に一生を尽くして行く姿が消えていつてしまっている様にも見える。その現われとして、ファイナンスの商業主義に踊らされて、「先に楽しみ、後でゆっくり返済」の言葉に乗せられ、返済に窮し自己破産者が急増している。お茶の水にある「後楽園」の語源は「先憂後楽」から発している。「先に憂えて、後に楽しむ」。本来日本の勤勉さと、世界に冠たる貯蓄性はこの精神に基づいている。

ところが、そうして働いて来た団塊の世代、周辺の世代、そして、その子供達も皆、憂えている。定年退職して年金で悠々自適もかなわず、若者は自分さがしに浮遊している。

そこで今回は「平常心」につい

て触れてみたい。平常心の言葉のイメージとして、動乱する日常生活の中で、平静な心を失わない境地と認識されていることでしよう。私も若い時、揺れ動く心を平静に保ちたいと、日曜参禅会に通った。雑念を打ち払い、揺れ動く日常の仕事に対処する境地として「無念無想」を求め坐る。しかし、無念無想となろうとするほど、沈殿していた澱が湧き上がって来て、かえって坐っていられない。静かに座禅しても心の中はかえって雑念の坩堝となる。そのことを師匠に尋ねると、「流せ」といわれた。執着した心をそのまま、あるがままに執われず流すことと受け止めた。仏法では、「離」、「捨」、「除」等の語があるが、煩惱の自体から、離れることも、捨てることも、除くことも出来ない自己がある事実である。

そこを念仏に尋ねれば、「動静己れにあらず、あるがままを受け止めて、念仏申す。」の一点である。他人の言動、周りの状況に振り回されず、「如来と我」との關係において、常に如来と対峙することが肝要です。喩えればヨットの重心が海の底に位置する様なものです。そうすれば揺れても、転覆しても復元するが如しです。「南無」の心が重心です。 合掌

鈴の音

人間は生まれ方によって生き方が変わるのではありません。生き方によって生まれ方が変わります。

藤元正樹(「地上に立つ宗教」)

真の依り処

私をこんなめに遭わせ、悪いのはあの人よ、この人よ、あつ苦しい、悲しいと、被害者意識そのものでした。失ったものがあまりにも大きく、自分は他より劣っていると感じ、劣等感にさいなまされ、とても表現出来ません。

死ぬに死ねない、生きるに生きれない状態の時、お寺の住職様より聞法会があるので是非、佛法を聞いて欲しいと親切にお誘いを受けました。最初は身重く、やっとの思いで座って聴かせて頂きましたが何も耳に入らなな来ませんでした。「私は藁をもつかむ思いで聴きに参りました」と先生にお答えすると、「藁はつかんでもすぐ沈んでしまいが、佛法とは、例えば大きな大木のようなものです。大木はどんな嵐でも、厳しい風雪に耐え凜としている。法とはそのようなものである」と教えて頂きました。

岡田ノリ子

報恩講

三年後の二〇一一年（平成二十三年）には宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌が本山にて厳修されます。また、折りしも浄土宗では法然上人の八百回忌法要が同時期に勤まります。法要期間中は全国からご同朋が京都へ上山参拝し賑わうことが今から想像されます。五十年に一度という宗祖の大法要であるが故に色々な準備がなされています。又、宗門内における盛り上がりの一

報恩講

- ・ 10月26日（日）
午前11時～3時まで
（10時30分受付）
- ・ 日中法要厳修
- ・ お齋（お食事）
- ・ 法話 樫暁師
（元教学研究所有長、
法泉寺前住職）
- ・ 講題 真実の宗教
—私にとって報恩とは—
- ・ 場所 光照寺本堂

※準備の都合上、出席の際はお寺にご連絡下さい。

道の人とはつまり浄土真宗という教えを實踐され、自分が真っ先に救われ喜びの生活をしておられる方。文化科学としての学者の研究というのではなく、『大無量寿経』を真実の教えとして自分が受けて救われていく、また事実救われて喜びの生活をしていられる方の代表者が親鸞聖人である。そういう意味で得道の人。道を得た人。道を得たというは「ここに道あり」とい

混迷する現代社会において親鸞聖人の指し示された世界に遇うことへの期待が高まっていると思わずにはおれません。しかしながら、ただのブームとして、或いは、御遠忌法要が大イベントとして消化される事業ということだけではなりません。昨年の樫先生のご法話で『得

方、思想界において『歎異抄』を基にした書物が次々と出版され、云わば、親鸞聖人ブームが内外に巻き起こりつつあるという現状を鑑みて、

うだけではなく、その道を実践させていたでいて、たすかりましたという事を明瞭にしてその喜びを多くの人に伝えてくれた人。』とお話しされております。

つまり、自分が親鸞聖人のみ教えにご縁をいただいで、南無阿弥陀仏の救いを領かしていただき、喜び、同朋と共に喜び味わっているかどうか。宗祖がお出ましにならなかつたら自他共の救いはなかつたという意味において御遠忌を勤める、或いは、報恩講に参座する、仏法聴聞する。そういう問いかけなくして何も無いということを生からいただきました。

ひとくち 歎異抄

羅漢：ゆれ動く心をどうしずめるか。
「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」

第2章



どの様な行為も末通ることのない自己自身であれば、地獄こそ決定的な住処なのです。

川越喜多院の五百羅漢



孟蘭盆会法要参詣の様子

いと思つてます。ご家族、縁者お誘い合わせの上、ご参詣下さい。お待ちしております。

副住職（釈徹照）

お知らせ

寺務所より

◆法要のご案内

●報恩講

十月二十六日(日)、午前十一時より厳修。詳細は三頁参照。

●修正会

平成二十一年一月一日元旦、午後一時より厳修。新年を阿弥陀如来のご尊前より出発致します。ご家族そろってご参詣下さい。

◆聞法会のお知らせ

●親鸞聖人のみ教えに聞く会

毎月開催。午後一時半～四時半まで。講師は樸曉先生。和讃を学んでいます。日程は寺にお尋ね下さい。(※十月は報恩講です)

●大経の会

十月四日、十一月九日、十二月七日。午前十時～午後三時まで。細川巖著正信偈讃仰(二)を学んでいます。お弁当持参して下さい。

●我聞の会

十月二十二日、十一月十九日、十二月十八日、午後二時～四時まで。真宗の簡要を学んでいます。講師は住職。

●微風学舎

毎月開催。午後七時～九時まで。講師は副住職。「顕浄土」の教学を学んでいます。日程は寺にお尋ね下さい。

●サークル活動 随時会員募集

①絵解きサークル
親鸞聖人の生涯のご伝絵などを伝えるものです。二ヶ月に一回。

②聲明サークル「響き」

日頃の勤行などを中心に味わいます。二ヶ月に一回。ご興味の方はお気軽にお寺までご連絡ください。

●さいたま親鸞講座

十月十一日、十二月十三日、平成二十一年二月七日、午後二時～四時まで。会場は大宮川鍋ビル。

●真宗のつどい

十月二十三日、十二月二十五日、午後二時～四時まで。会場は埼玉県内の寺院。ご参加の際はお寺にご連絡下さい。

●お願い

ご自宅で法事の際は駐車場をご用意下さい。宜しく願います。



青沢 光昭

漁火を宙に仰ぎし鳥海山
強風雨足止め悔しき登山かな
気入りの団扇の風や涼しけり

西木 順子

緑揺る岩山を来し猿ならん
ちんぐるまガスの流れは日の流れ
山百合の花の重さを咲きてより

花岡 要

葉がくれに咲く夕顔のうすみどり
子育ての雀見ながら胡瓜もみ
庭の樹のしみじみと蝉鳴きにけり

布施 毅夫

幾つかの夏大橋や盆婦郷
奥座敷鴨居に先祖の顔並び
泉水に緋鯉が跳ねる夏座敷
石路の葉に目覚めたる飛蝗かな
あの人もこの空の下雷雨くる

釈 義深

オリンピック感動もあり口惜しさも
聞法をよくする人は菩薩かな
お寺とは我が家の座敷仏接間



田中 徳子

ペランダに青き朝顔の一輪が静かに
咲きており心洗わる
蝉のこえ猛暑の夏をおしむごと林
の中より時々ひびき来

赤秀 品枝

うつむきて足早に去る敗者達心に
誓え明日あることを
友達を許さぬ心癒えぬまま許されて
いる我身をおも

布施 毅夫

ふる里の山向いて名を叫ぶ「お元
氣ですな」と訃がかえる
わが海はテトラポットに囲われて
餓鬼大将の足跡もなし
海沿いに植林された防風林しぶ
とき松の浜風おこす

篠原 潤子

愛犬がふーッと小さく溜め息を
めんこい体で人並につく
愛犬がクーンクーンと切なげに
ゴミ袋持つ夫を見送る
赤パンツ洒落で送りし恩人がはい
て達成富士登頂

本捨てる五十才の夏の夜ただ思
うのは信心のこと
驟雨あと愛犬をつれ散歩するわず
かばかりの砂利道求め

罪のない人々が思いがけず
事件に巻き込まれることが続
いている。そんな中、福岡母子殺
人事件の判決があった。被害者
の夫は死刑が最大の報いである
と語気を強めた。罪のない人が
殺され、深い悲しみの闇に突き
落とされた家族の痛みが同じ思
いをした身に響く。相手の罪を
咎めても失われた命は帰ってこ
ない。分かっていても返して欲
しいと相手を責める。怒りは行
き場所を探して社会に矛先を向
けたり、悪いことをしていない
私かなぜこんなことになるのか
と自分自身を問い詰めたりし
て、心に安らぎはない。全く不
条理なことであるが、これも縁
起であると気付くには時間が必
要だ。死刑判決が結論であるよ
うに語っていた被害者はその結
果を得たが、それだけでは救わ
れない。生きるとは。命の重さ
はどういうことか。私という存
在の根源は何にあるのかと問い
続けた。合掌。

梵鐘



花岡 要 画

釋尼雅亮